

—国内動向—

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向（令和8年1月）

【ポイント】

- 気温は、北日本で低かった。降水量は、北・東日本日本海側でかなり多かった一方、東・西日本太平洋側、西日本日本海側、沖縄・奄美でかなり少なかった。日照時間は、東・西日本太平洋側、西日本日本海側、沖縄・奄美でかなり多かった。降雪量は、北日本日本海側でかなり多かった。
- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万2193トン、前年同月比106.6%、価格は1キログラム当たり290円、同81.1%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万3582トン、前年同月比105.5%、価格は1キログラム当たり264円、同84.1%となった。
- 年明けの野菜産地は、太平洋側の多日照地域にあり、少雨の状況が続いているものの、各産地ともに生育は順調で、野菜の出荷に問題はないと予想される。

(1) 気象概況

上旬の旬平均気温は、周期的に低気圧や気圧の谷が日本付近を通過した後、冬型の気圧配置となり、寒気の影響を受けやすかった北日本と沖縄・奄美で低かった。

旬降水量は、冬型の気圧配置の強まった1～2日頃と、8日頃は北・東日本日本海側の一部で大雪となり、気圧の谷や寒気の影響を受けやすかった東日本日本海側でかなり多く、北日本日本海側で多かった。一方、冬型の気圧配置となりやすかったことや高気圧に覆われる時期もあったため、北・東・西日本太平洋側、西日本日本海側で少なかった。

旬間日照時間は、期間の後半に東日本太平洋側や西日本を中心に高気圧に覆われた日もあったため、東・西日本太平洋側でかなり多く、西日本日本海側で多かった。

中旬の旬平均気温は、冬型の気圧配置が長続きせず、低気圧が頻繁に日本海から北日本を通過し、日本海を進んだ低気圧に向かい、暖かな空気が本州付近に入りやすかったため、東・西日本でかなり高く、北日本と沖縄・

奄美で高かった。

旬降水量は、北日本では低気圧の影響を受けやすかったため、北日本日本海側でかなり多く、北日本太平洋側で多かった。一方、東日本以西は、高気圧に覆われやすく、太平洋側を中心に晴れた日が多かったため、西日本日本海側、西日本太平洋側と沖縄・奄美でかなり少なく、東日本太平洋側で少なかった。

旬間日照時間は、北日本日本海側でかなり少なく、東・西日本太平洋側、西日本日本海側、沖縄・奄美でかなり多かった。旬間日照時間平年比は、西日本日本海側で171%、西日本太平洋側で151%となり、1961年の統計開始以降で1月中旬として1位の多照となった。

下旬の旬平均気温は、寒気の影響を受けやすかったため、東日本でかなり低く、北・西日本で低かった。

旬降水量は、冬型の気圧配置となりやすく、北・東日本日本海側でかなり多かった一方、東・西日本太平洋側でかなり少なく、北日本太平洋側、西日本日本海側、沖縄・奄美で少なかった。21～25日頃と29～30日頃は

冬型の気圧配置が強まり、日本海側を中心に記録的な大雪となった所があった。

旬間日照時間は、東日本日本海側でかなり少なかった一方、北・東・西日本太平洋側と

西日本日本海側で多かった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は図1の通り。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本				日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側
東日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側
西日本									

資料：気象庁「1月の天候」

1 平年を上回る水準 2 平年並み 3 平年を下回る水準

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万2193トン、前年同月比

106.6%、価格は1キログラム当たり290円、同81.1%となった(表1)。

表1 東京都中央卸売市場の動向(1月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	102,193	106.6	94.8	290	81.1	107.3	309	285	279
だいこん	9,792	105.0	97.8	72	55.2	76.8	83	63	70
にんじん	5,690	107.1	91.0	149	77.6	113.8	167	148	141
はくさい	13,730	117.7	104.3	56	40.7	90.8	64	54	53
キャベツ類	12,905	123.4	98.3	81	34.5	72.7	75	81	86
ほうれんそう	1,575	106.8	108.0	540	81.4	93.5	594	519	516
ねぎ	4,801	112.9	100.0	357	73.7	104.2	484	318	299
レタス類	5,557	101.7	92.1	241	63.6	87.9	230	249	245
きゅうり	4,023	99.3	92.8	491	100.8	110.7	487	492	493
なす	1,394	100.1	90.3	480	89.4	104.7	507	487	455
トマト	4,569	107.3	90.0	454	95.4	130.2	519	439	412
ピーマン	1,351	91.6	85.9	716	96.6	110.9	635	715	779
さといも	404	81.9	81.6	427	111.2	124.7	463	455	386
ばれいしょ	5,862	96.7	88.0	293	126.4	158.2	289	292	295
たまねぎ	6,437	86.4	77.6	243	157.3	161.5	236	242	249

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年(令和3~7年)平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、だいこんの価格が、中旬以降落ち着き、大幅に高値で推移した前年を4割以上下回り、平年を2割以上下回った（図2）。

葉茎菜類は、キャベツの価格が、暴騰した前年を6割以上下回り、平年を3割近く下回った（図3）。

果菜類は、トマトの価格が、中旬以降やや落ち着いたものの、堅調な推移となり、大幅

に高値で推移した前年をやや下回り、平年を3割強上回った（図4）。

土物類は、たまねぎの価格が、絶対量不足が続いていることから、高値安定となり、前年を6割近く上回り、平年を6割以上上回った（図5）。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 だいこんの入荷量と卸売価格の推移

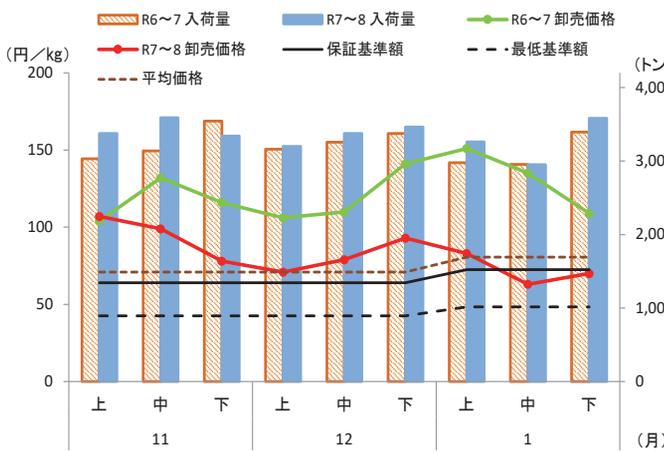


図3 キャベツの入荷量と卸売価格の推移

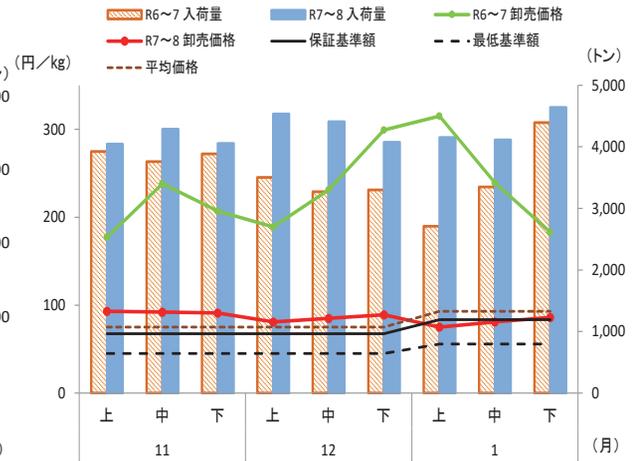


図4 トマトの入荷量と卸売価格の推移

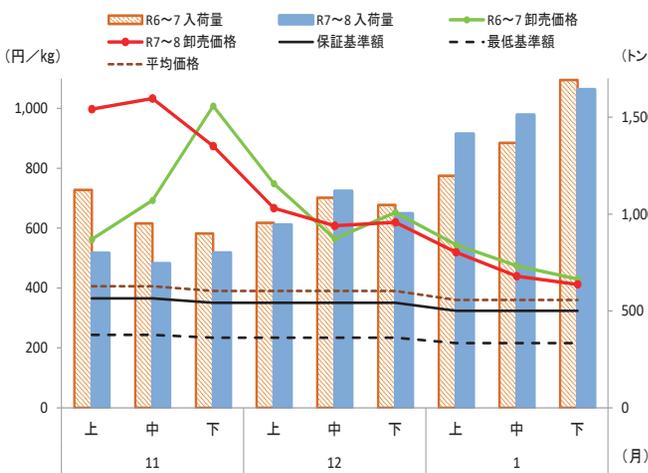
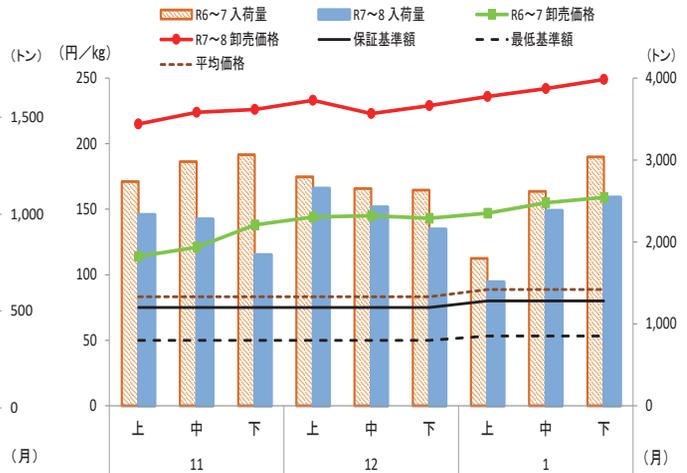


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。

※2 平均価格とは、事業における過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。

※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	1月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>千葉産、神奈川県産が中心の入荷であった。千葉産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調である。一部で、乾燥による横縞しま症が散見されるが、品質はおおむね良好である。神奈川県産の作付面積は前年並みで、播種期から生育期の高温傾向や、その後の降雨からの乾燥で生育は前年並みである。気温の低下と乾燥により、病虫害は少ない。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は、中旬以降落ち着き、大幅に高値で推移した前年を4割以上下回り、平年を2割以上下回った。</p>
	にんじん 	<p>千葉産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、12月の好天で肥大が進んでおり、前年並みの生育に回復し順調である。若干病害が散見されるが、影響は軽微である。輸入の中国産は、前年を4割以上下回っている。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度上回り、平年を1割近く下回った。</p> <p>価格は、大幅に高値で推移した前年を2割以上下回り、平年を1割以上上回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>茨城産中心の入荷であった。前年の高値により作付け意欲が高く、作付面積は前年をやや上回った。10月の高温、12月の乾燥により生育はやや遅延傾向で、全体的に小玉傾向である。総入荷量は少なかった前年を2割近く上回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は大きな動きはなく、大幅に高値で推移した前年を6割弱下回り、平年を1割ほど下回った。</p>
	キャベツ類 	<p>愛知産を中心に、千葉産などの入荷があった。愛知産の作付面積は前年並みで、やや遅延が散見されていた生育は、適度な降雨と気温に恵まれ回復し順調である。千葉産の作付面積は前年並みであり、適度な降雨と高めの気温に恵まれ生育はやや前進傾向で、高気温の影響で病害が散見される。総入荷量は、大幅に少なかった前年を2割以上上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は大きな動きはなかったものの、暴騰した前年を6割以上下回り、平年を3割近く下回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>群馬産、茨城産が中心の入荷であった。群馬産の作付面積は前年並みで、一部低温・乾燥などによる生育停滞が散見されたが、生育はおおむね順調である。病虫害の発生が散見される。茨城産の作付面積は前年並みで、乾燥の影響により一部生育のばらつきが散見されたが、おおむね順調である。総入荷量は、前年並みであった前年、平年ともに1割近く上回った。</p> <p>価格は、安定した出荷量により上旬から動きが鈍く、連休前の増加もあり、月間を通して厳しい動きとなり、高値で推移した前年を2割近く下回り、平年をかなりの程度下回った。</p>
	ねぎ 	<p>千葉産、茨城産など、関東秋冬作中心の入荷であった。千葉産の作付面積は前年並みで、夏季の高温・乾燥の影響はあったものの、12月の天候に恵まれたことから、肥大は進んでおり、生育良好である。茨城産の作付面積は前年並みで、遅延していた肥大は回復傾向でおおむね順調である。輸入の中国産は、前年を3割以上下回っている。総入荷量は少なかった前年を1割以上上回り、前年並みとなった。</p> <p>価格は、前月の高値のまま上旬から一気にピークとなり、中旬以降に下げた。月間では、大幅な高値で推移した前年を3割近く下回り、平年をやや上回った。</p>
	レタス類 	<p>静岡産を中心に長崎産、香川産の入荷があった。静岡産の作付面積は前年並みで、前年の高温を受けて定植を遅らせたことや、低温・乾燥から生育は遅延傾向であったが、12月の降雨により肥大が進み回復した。長崎産の作付面積は前年並みで、比較的温暖な気候から生育はおおむね順調である。香川産の作付面積は、前年をやや下回った。低温・乾燥傾向であったが、年末の降雨により前年並みに回復した。病害の発生は少ない。総入荷量は、少なかった前年をわずかに上回り、平年を1割近く下回った。</p> <p>価格は大きな動きはなかったものの、大幅に高値で推移した前年を4割近く下回り、平年を1割以上下回った。</p>

果菜類	さゆり	<p>宮崎産を中心に千葉産、高知産などの入荷があった。宮崎産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、一部で着果負担による樹勢の低下が散見された。また、病虫害の発生が散見される。千葉産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、半促成作の生育は定植遅れからやや遅延している。病害が散見されるが、大きな影響はない。高知産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育は順調である。病虫害の発生も散見されるが少ない。総入荷量は少なかつた前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、安定した値動きで、高値で推移した前年をわずかに上回り、平年を1割強上回った。</p>
	なす	<p>高知産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、12月の安定した気候から生育は順調である。一部の圃場で虫害が散見されるが、大きな影響はない。また、病害が散見される。総入荷量はやや少なかつた前年並みとなり、平年を1割ほど下回った。</p> <p>価格は、中旬以降落ち着きを見せ、高値で推移した前年を1割強下回り、平年をやや上回った。</p>
	トマト	<p>熊本産を中心に栃木産、愛知産などの入荷があった。熊本産の作付面積は前年をやや下回った。夜温の低下による裂果や病害が一部散見されているが、生育はおおむね順調である。栃木産の作付面積は前年並みで、促成作の生育はおおむね順調である。冬春作の樹勢は良好で、病虫害が散見されるが大きな影響はない。愛知産の作付面積は、前年をやや下回った。玉の肥大は回復し、生育は順調だが虫害が散見される。総入荷量は少なかつた前年をかなりの程度上回り、平年を1割下回った。</p> <p>価格は、中旬以降やや落ち着いたものの、堅調な推移となり、大幅に高値で推移した前年をやや下回り、平年を3割強上回った。</p>
	ピーマン	<p>宮崎産を中心に高知産、鹿児島産などの入荷があった。宮崎産の作付面積は前年をやや下回った。生育はおおむね順調だが、急激な気温低下による樹勢低下が見られた。一部で、病虫害の発生が散見される。高知産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、病虫害が散見される。うどんこ病の発生がやや多い。鹿児島産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調である。総入荷量は少なかつた前年を1割近く下回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は、下旬に向け徐々に上げ、高値で推移した前年をやや下回り、平年を1割強上回った。</p>
土物類	さといも	<p>埼玉産を中心に愛媛産などの入荷があった。埼玉産の作付面積は前年並みで、収穫を終了した。夏場の高温・乾燥の影響により、年内から不足感があり、残量も少ない。愛媛産の作付面積は、前年をやや下回り、玉肥大もよく生育良好である。輸入の中国産の入荷量は、前年を4割ほど上回った。総入荷量は、前年並みであった前年、平年ともに2割近く下回った。</p> <p>価格は、下旬に落ち着いたものの、高値で推移した前年を1割以上上回り、平年を2割以上上回った。</p>
	ばれいしょ	<p>北海道産を中心に鹿児島産などの入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫を終了した。夏場の高温・乾燥の影響により、小玉傾向である。鹿児島産の作付面積は前年並みで、肥大も進み生育はおおむね順調ではあるが、病害の発生が散見される。総入荷量は少なかつた前年をやや下回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足から堅調推移となり、大幅な高値で推移した前年を2割以上上回り、平年を6割近く上回った。</p>
	たまねぎ	<p>北海道産が中心の入荷であった。作付面積は前年並みで収穫を終了した。高温・乾燥の影響で小玉傾向である。輸入の中国産は、前年を9割以上上回り、米国産が大幅に増加した。総入荷量は、少なかつた前年を1割以上下回り、平年を2割以上下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足が続いていることから高値安定となり、前年を6割近く上回り、平年を6割以上上回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万3582トン、前年同月比

105.5%、価格は1キログラム当たり264円、同84.1%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(1月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	33,582	105.5	98.4	264	84.1	111.2	274	258	262
だいこん	3,180	111.8	102.0	77	62.2	92.8	84	72	75
にんじん	2,192	113.2	103.1	135	71.7	109.5	147	133	128
はくさい	5,094	106.6	111.7	65	41.3	82.6	68	61	64
キャベツ類	4,573	127.4	111.8	77	36.6	73.2	70	75	84
ほうれんそう	523	137.3	119.4	484	65.7	84.5	454	493	501
ねぎ	1,064	106.6	101.7	494	78.4	106.3	632	462	422
レタス類	790	116.4	93.9	217	56.2	82.1	211	225	215
きゅうり	996	103.1	97.0	459	100.6	110.7	452	460	464
なす	518	116.3	132.1	443	81.2	100.2	451	443	437
トマト	1,514	111.2	111.4	424	92.3	124.1	482	411	388
ピーマン	433	99.1	124.1	655	92.1	104.5	568	647	735
さといも	101	124.4	92.7	404	81.5	115.6	432	428	367
ばれいしょ	2,041	76.5	75.3	299	130.1	165.0	293	301	301
たまねぎ	3,425	76.5	79.2	237	158.9	164.2	235	231	244

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年(令和3～7年)平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

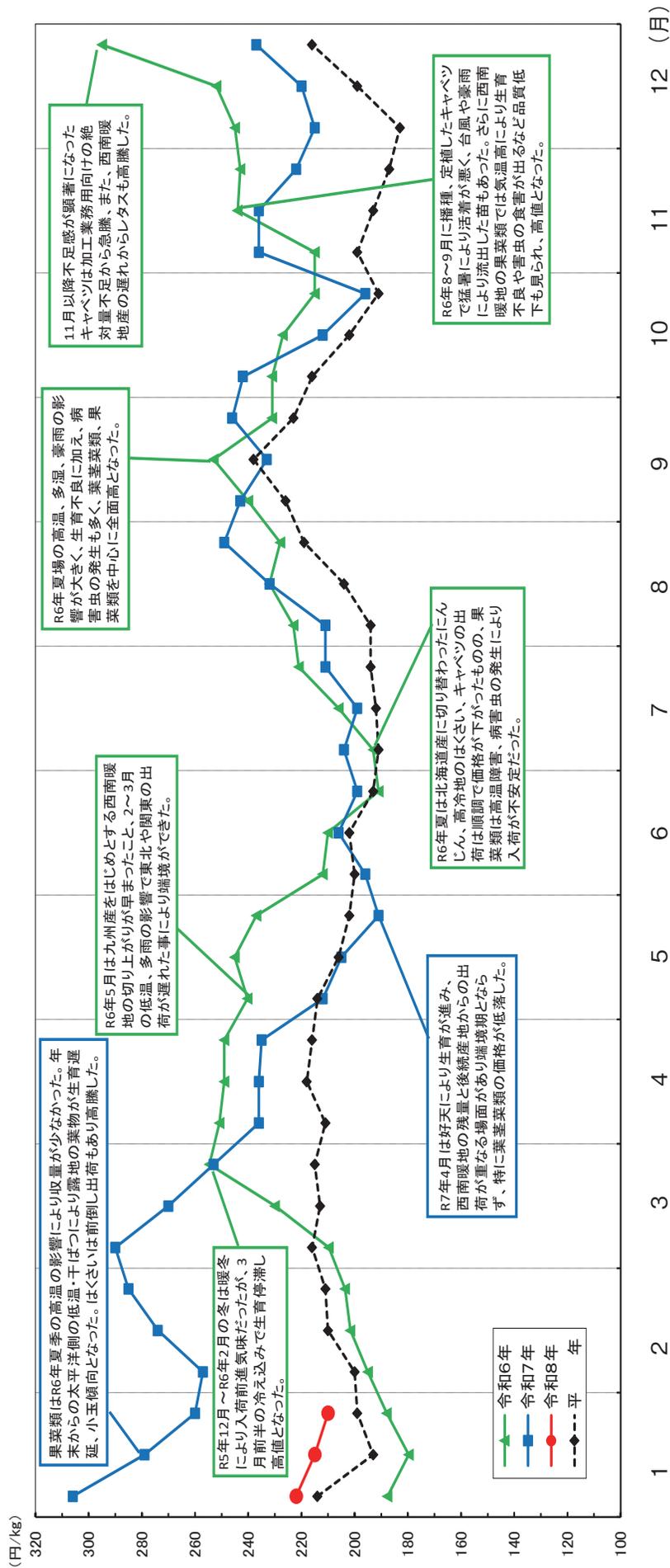
類別	品目	1月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	主力は鹿児島産、徳島産、和歌山産で、長崎産などの入荷もあった。各地とも干ばつと急な気温低下の影響により生育が進まず、産地出荷量は伸び悩んだ。月間の入荷量は、少なかった前年をかなり大きく上回り、平年をわずかに上回った。 価格は、野菜類全体が単価高だった前年を4割近く下回り、平年をかなりの程度下回った。
	にんじん 	鹿児島産と長崎産が中心の入荷であった。前年末に前進出荷した影響により、年明けの入荷が減り、中旬以降に回復が見られたが、全体として入荷は伸び悩んだ。前年の入荷量が極端に少なかったこと、近年は不作続きだったことから、月間の入荷量は前年をかなり大きく上回り、平年をやや上回ったが、決して多いという状況ではなかった。 価格は、野菜類全体の単価高と、絶対量不足で高騰した前年を3割近く下回り、平年をかなりの程度上回った。

葉茎菜類	はくさい 	<p>茨城産が中心となり、愛知産や兵庫産、和歌山産などの入荷があった。干ばつの影響により、前年に出遅れていた分が、年末の降雨で生育回復し、上旬に入荷増量となり、前年を大きく上回った。中旬以降は再び干ばつとなり、下旬には急な気温低下の影響もあって入荷量は伸びなかった。月間全体の入荷量は、前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく上回った。</p> <p>価格は、極端な単価高だった前年の半分以下で推移した。気温が低下し、需要は一時的に伸びたが、安値慣れした後、需要が鈍化して引き合いが強まらず、入荷量が伸びない中でも、価格は安値で推移した。月間の価格は、前年を6割近く下回り、平年を2割近く下回った。</p>
	キャベツ類 	<p>寒玉キャベツは、愛知産が中心となり、大阪産などの入荷もあった。春キャベツは、愛知産を中心に、兵庫産や和歌山産の入荷もあった。前年の入荷量が極端に少なかったことに加え、生育順調で安定した出荷が続いたことで、各産地とも前年を大きく上回る入荷量が続いた。特に愛知産の春キャベツは、前年の3倍もの入荷量となった。また、新規の大口納品先も増えて引き合いが強まり、積極的な入荷となり、月間全体の入荷量は、前年を3割近く上回り、平年をかなり大きく上回った。</p> <p>価格は、前年が極端な高騰を続けたことと、潤沢な入荷が続いたことから安値で推移した。旬を追うごとに上昇したが、月間では前年を6割以上下回り、平年を3割近く下回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>徳島産と福岡産が中心となる入荷であった。各地とも生育順調で出荷ピークを迎え、全旬とも入荷量が多い状況が続き、月間入荷量は、徳島産が前年をかなり上回り、福岡産は前年の2倍以上となった。全体でも前年を4割近く上回り、平年を2割近く上回った。</p> <p>価格は、量販店の末端価格が下がり、消費は伸び悩み、特売などの積極的な販売もなく在庫過多となり、低迷を続けた。月間では、前年を3割以上下回り、平年をかなり大きく下回った。</p>
	ねぎ（白ねぎ） 	<p>群馬産を中心に、主力の鳥取産や静岡産、埼玉産などの入荷があった。各産地とも生育順調で平年並みの安定した出荷が続いた。月間では、前年をかなり上回った。</p> <p>価格は、入荷増量に伴い旬を追うごとに下落し、野菜類全体が高値だった前年を下回って推移し、月間では、前年を大幅に下回った。</p>
	ねぎ（青ねぎ） 	<p>青ねぎは、徳島産が中心となり、香川産や近隣の大阪産などの入荷があった。細ねぎは高知産と静岡産が主体となった。各地とも生育順調で潤沢な産地出荷が続き、全旬を通して入荷量が多い状況が続いた。月間全体の入荷量は前年を大幅に上回った。</p> <p>量販店などの末端価格が高値のままで下がり、需要が伸び悩み在庫過剰気味となり、荷動きが鈍化して市場相場は安値で推移した。月間では、前年を大幅に下回った。</p>
	レタス類 	<p>玉レタスのラップ物は、兵庫産を中心に香川産の入荷があった。裸物は、長崎産、鹿児島産など九州産地の入荷が主体となった。干ばつの影響により、ラップ物の産地出荷が伸びず、中旬以降の入荷量が少ない状況となった。それを受けて裸物の利用が増えたため、全体としては入荷増量となり、月間全体の入荷量は、前年を大幅に上回った。サニーレタスは、福岡産が中心となる入荷で、干ばつの影響により産地出荷量は伸び悩んだ。リーフレタスも福岡産が中心となる入荷であったが、サニーレタス同様に干ばつの影響により、産地出荷量は伸び悩んだ。レタス類全体の月間入荷量は、前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格については、玉レタスは安い裸物の量が増えたことで旬を追うごとに下落を続け、月間では前年の半値程度にとどまった。サニーレタスとリーフレタスは引き合いが弱く、価格は低迷した。レタス類全体の月間の価格は、前年を4割以上下回り、平年を2割近く下回った。</p>

果菜類	きゅうり 	<p>宮崎産が中心となり、高知産や徳島産の入荷があった。各地とも生育順調で、潤沢な産地出荷が続いた。主力の宮崎産の月間入荷量は、前年をかなり上回ったが、引き合いが弱く販売に苦戦した。他産地の入荷量は伸びなかった。月間全体の入荷量は、前年をやや上回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、荷動きが悪く引き合いが強まらない中でも末端の販売価格は高く、月間では前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	なす 	<p>千両系は、高知産を中心とした入荷で、長なすは、福岡産と熊本産が主体となる入荷であった。各地とも前年末に出荷予定だったものが年明けにずれ込み、産地出荷量が多い状況が続いた。月間入荷量は、高知産が前年を大幅に上回り、福岡産も前年を1割以上上回った。月間全体でも、前年を大幅に上回り、平年を3割以上上回った。</p> <p>気温が低く、量販店でも売り場が小さいままで引き合いも強まらず、販売には苦戦した。月間の価格は、前年を2割近く下回り、平年並みであった。</p>
	トマト 	<p>主力の愛知産と熊本産が主体となる入荷であった。前年末の出荷予定分が遅れて年明けにずれ込んだため、月の前半の入荷量が多く、月間全体の入荷量は、前年、平年ともかなり大きく上回った。</p> <p>気温低下により需要が伸びず販売に苦戦し、価格は、高値だった前年をかなりの程度下回り、平年を2割以上上回った。</p>
	ピーマン 	<p>宮崎産が中心となる入荷であった。産地の出荷は順調で、前年並みであったが、引き合いが強まらず積極的な集荷ができなかった。月間全体の入荷量は、前年をわずかに下回り、平年を2割以上上回った。</p> <p>価格は、気温が低くて需要が伸びない中で、末端売価が高く、販売に苦戦した。月間では前年をかなりの程度下回り、平年をやや上回った。</p>
土物類	さといも 	<p>愛媛産が中心となり、山形産の入荷もあった。海老芋は、静岡産が中心となる入荷であった。順調な産地出荷が続き、安定した入荷が続いた。輸入の中国産の入荷は、業務関係を中心に需要があり、前年を大幅に上回った。月間全体の入荷量は、前年を2割以上上回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、年末年始の需要期を過ぎ、年明けから旬を追うごとに下落傾向であったが、安定した高値で推移した。野菜類全体の単価高から高騰していた前年に比べ、月間の価格は2割程度下回り、平年をかなり大きく上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>月の前半は北海道産の残量入荷が主体となったが、新物の長崎産がスタートし、中旬からは鹿児島産もスタートした。北海道産は不作で、産地出荷量が少ない状況が続いていたが、後続産地のスタートに合わせて残量出荷となり、入荷は増量した。後続産地も比較的順調な出荷となり、月間全体では前年を上回る入荷量になった。メイクインは北海道産の残量入荷であったが、不作で出荷調整もあったため産地出荷量が少ない状況が続いた。ばれいしょ全体の月間入荷量は、前年、平年ともに2割以上下回った。</p> <p>価格は、不足感から高値だった影響が残り、月間では前年を3割以上上回り、平年を6割以上上回った。</p>
	たまねぎ 	<p>北海道産が主体となる入荷であったが、不作の影響で産地残量が少なく、全旬を通じて入荷量が少ない状況が続いた。中旬に新物の長崎産がスタートしたが、入荷は安定せず、前年の半分程度という状況で、月間全体の入荷量は、前年、平年ともに2割以上下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足から高騰を続け、全旬とも前年の1.5倍以上の状態が続いた。月間全体でも、前年を6割近く上回り、平年を6割以上上回った。</p>

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

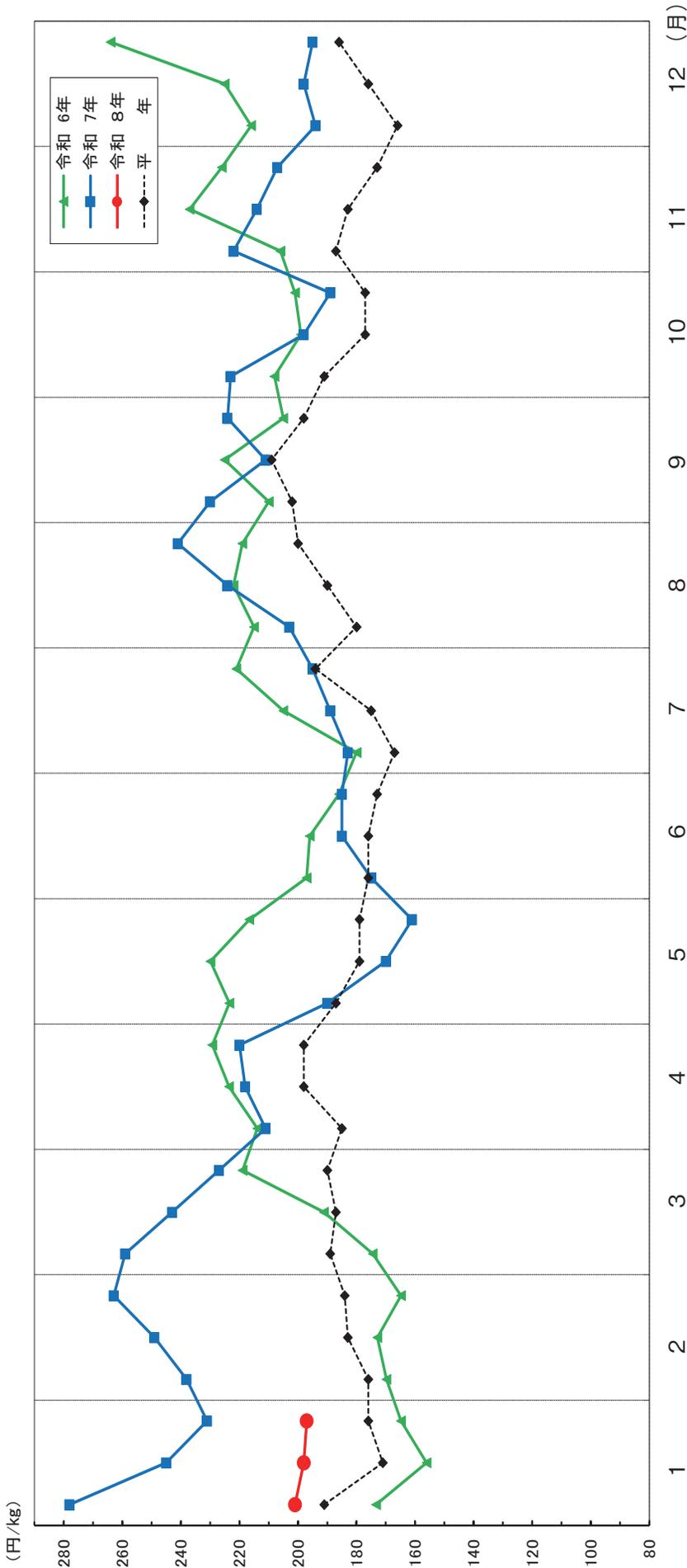
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	中旬	下旬																																	
令和6年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	249	240	245	237	212	210	191	193	206	221	223	232	228	240	253	231	231	244	243	245	252	295			
令和7年	306	279	260	257	274	285	290	270	253	236	235	212	205	191	196	206	199	204	199	211	211	232	249	243	233	246	242	212	196	236	222	215	220	237		
令和8年	222	215	210																																	
平年	214	193	199	200	210	211	216	213	215	211	218	216	214	206	202	200	202	193	191	192	194	194	204	219	226	238	223	216	202	191	199	193	187	183	199	216

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（令和3年～7年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、定橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月														
	上旬	中旬	下旬																																		
令和6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197	196	186	180	205	221	215	222	219	210	225	205	208	199	201	206	237	226	216	225	264	
令和7年	278	245	231	238	249	263	259	243	227	211	218	220	190	170	161	175	185	185	183	189	195	203	224	241	230	211	224	223	198	189	222	214	207	194	198	195	
令和8年	201	198	197																																		
平年	191	171	176	176	183	184	189	187	190	185	198	198	187	179	176	176	176	173	167	175	194	180	190	200	202	209	198	191	177	177	187	183	173	166	176	186	

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
 注1：平年とは、過去5カ年（令和3年～7年）の旬別価格の平均値である。
 注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。